Book Review 27 ノンフィクション　＃20 世紀の最大の謀略

『20 世紀最大の謀略』（落合信彦著）を読んでみた。著者の実兄は空手家で、本人も米国で空手を教えていたようだ。息子はメディアアーティスト/研究者の落合陽一。著者が落合陽一の父親と知り、本書を読んでみることにした。

国際情勢や諜報関係の事情をレポートした作品やそれらを題材とした小説、翻訳を得意としている。フィクション、ノンフィクション問わず世界を舞台にしたスケールの大きい話が多いらしいが、発言には信憑性に欠ける面もあるようだ。

本書は 1977 年に出版した『2036 年の真実』に、新たに入手した情報を書き加えて 1993 年に出版されている。2013 年 11 月 22 日に米国大統領ジョン・F・ケネディの暗殺の真相を追った増補文庫化である。2036 年とは、米国政府により封印されている暗殺に関する多くの証拠物件が解禁される年だそうだ。

「正式」発表では、オズワルド単独犯行説となっているが、米国人は現在誰一人として信じていない。その矛盾を延々と述べている。矛盾だらけだ。重要証人 16 名が相次いで変死している。ダラスでのパレードルートが突然変更された不可解さを探る。「大統領を撃ち抜いた弾丸」の軌道が物理現象で説明できない。CIA,FBI にケネディに恨みを持つマフィア・コネクションが絡む。
結局、ケネディ兄弟が軍産複合体・マフィアの利益を排除しようとした試みが、彼らの怒りを買った結果であった。
著者は、さらにリチャード・ニクソンが絡んでいることを強調している。
本書を読むと、ケネディ暗殺の背景にある米国の巨大な闇が垣間見える。

ケネディ暗殺を参考に、伊坂幸太郎が『ゴールデンスランバー』を書いている。首相暗殺事件の濡れ衣を着せられた男の話。